〈近世女性史資料 (1)〉

女中庸教訓鏡（全）

――書誌・翻刻――

黄　色　瑞　華[*1]
若　林　俊　英[*2]

＊1　城西大学教授・主任研究員
＊2　城西大学女子短期大学部専任講師

Ⅰ　書　誌

所蔵　城西大学国際文化教育センター

書型　半紙本。縦 21.6 センチ，横 15.2 センチ。

表紙　厚紙の上に縹色無地の極薄紙を貼る。

題簽　左肩。茶渋色四周枠，縦 15.7 センチ，横 3.3 センチに，

　　女中庸教訓鏡　全

綴糸　木綿糸 2 本掛。

見返　本文と同一料紙 1 丁を袋綴にして貼り，

　　山﨑先生校正

　女中庸教訓鏡

　　江都　上友堂蔵

内題　女中庸

丁数　41 丁（墨付 82 面）。

各面　5 行。

匡郭　縦 18.9 センチ，横 13 センチ。

柱刻　女中 0―（～四十一）。

奥付　　小林　新兵衛

　　英　　大　助

　　和泉屋市兵衛

　江戸書林　山口屋藤兵衛

　　藤岡屋菱次郎

　　山﨑屋　清七

　　上総屋友次郎

刊記・序・跋はない。

Ⅱ　翻　刻

凡　例

1　『女中庸教訓鏡』の忠実な翻刻を旨とする。ただし，読解の便を考慮して，適宜句読点を付した。

2　使用漢字は可能なかぎり原形のままとし，原本の面影を伝えるようにした。

3　漢字ルビもすべて原本のままとした。

4　紙面の構成上，行移りは原本どおりにはできないが，丁移り・表裏の別は，1 オ・1 ウを以て注する。

女中庸

一　夫人の妻を親迎る事は，第一我父母に我身と與に能つかへさせむが為なり。しかるに，舅を」一オうらみ，姑をにくむ事かならず婦の心より出たる事也。されバ，素より姑は婦を慈ミ，婦は猶姑に孝行を竭すべき』一ウ理なり。故に，誰の人も，孝心なる人と讃ば，こゝろ半諫，ふ孝なる婦と卑しめバ，必ず忿りはらたつ。然ば，」二オ孝行なるべき理は，人〳〵豫て知れる者なり。至極不仁なる婦も，人前にてハ，孝行なるふりあるもの也。夫婦ハ』二ウいとをしミ，大切成我子の妻なれバ，其舅姑のこゝろいとをしミ愛せざらむや。惡ミ思べきの心ぞ。ならバ，何の」三オ為にか，よび迎べきや。娶迎る時には，憎心は露ばかりなけれども，婦の容儀，萬の仕業，心質，躬の行状の全く備ら』三ウざるゆゑに，慈愛するこゝろも，次第に薄くなり，日に添て惡心の出きて，會釈物事圭角〳〵しく成もてゆき，」四オ復婦も他人の家へ嫁し，舅に悖逆，姑に不孝にせんとおもふ心ハ，些もあるまじ。一向に舅姑の氣に惜ひ，夫に好思はれ』四ウんとのミおもふ心なるべけれど，彼圭角〳〵しき品を瞻，またハ陰の噂の好らぬを聞及びて，胸に倒ひ心の外なる」五オ事かな，と思ふ心にて，舅姑に事ぬるにより，いよ〳〵氣にさかひ，和を失ふ者也。此理を能〳〵辨へ舅姑ハ我を』五ウ仁愛し玉ふもの也，と心得て，我父母よりも大切に和解て能つかふべし。若舅姑の仕業にあしき事ぞあらバ，」六オ是は舅姑のあしきにはあらず，我身によからぬ事の有ゆゑに若有物ぞ，と身を省て我過ちを能〳〵思ひ改めて，』六ウ却て孝行の実を竭すべし。假令にも舅姑を怨ミ咎むべからず。萬一咎め怨るの心發なば，是ハ天道にも弃られ，」七オ人道にも背，不祥おこり，我身子孫の衰べきわざなり，と思ひかへし，恐懼なば，家内も能治り，子孫も栄利，柾木のかつらながく』七ウ家名を傳ん事必然の理なり。

姑に親よりも猶孝行を
つまバ婦とも和順べし

此哥の意味を能〳〵理」八オ會て，舅姑に眞實に孝行を竭すべし。

一　婦人の幼き時は親に從ひ，壯の節ハ夫に從ひ，老ては子に從ふを三從』八ウの道と云り。三從のうちには，夫に從ふ道より外に辛苦ハなし。幼時親に從事は恩愛の情なれバ，理の常なり。老ての後子に」九オ從ふハ積累し恩のむくひなれバ，素より有べき事ぞかし。唯夫に從ふ理をよく理會しらずハ，星霜を重ねて配偶がたく，夫ハ外を』九ウ勤め，婦は内を守，といへり。先夫を主君のごとく恭，傅き，婉，娩べき

事ぞかし。唐土に，或の女嫁して程なく其夫癩病をうけ，」十オ容貌損じ變れり。女の親堪がたく思ひて，女を戻還といへども，女深憂て，我夫かやうの病を稟事も我身の不幸も定れる』十ウ事なり。古語に，貞女不更二夫，忠臣不仕二君，一度醮し緣二たび革る事道なし，とて却て親を諫て還らん意さらに」十一オなかりしかバ，父母も此節操を感じ，忸懷て，戻還さん心を止けるとなん。實に有難き心底なり。當時の婦人是を能学び，』十一ウ及ばぬ迄も心にかくべき事ぞかし。婦人の心貞心の堅固事ハ，露許もなく，親の海仲媒の使も結納ずして，己黨奇異の緣を」十二オ契び，一年の半季も荏苒ざるに，些の不實を爭誣，夫婦の道を離れ，他夫に嫁し，先夫を草芥の如く見捨るの類ひ，此烈女の』十二ウ心操を感じ，松柏の年の寒に凋ざるの節操を些は學べし。

冬の来て山もあらハに

木葉ふり残る松さへ」十三オ

峯にさびしき

此哥ハ新古今冬の部に在。哥の心ハ，春夏の千草萬木紅白色を交へ，己がまゝに爛漫れども，』十三ウ秋冬の烈嵐に殺，木々の木葉も散乱になりもて行，千種の花も莫零，滿山に一木もなきの節，松の青葉の常磐ずして」十四オ殘れるを讀り。婦人の節操も此哥の如く有べき事ぞかし。不義の眼よりハ，夫の困究に厄，木曽の麻布断絶しきに』十四ウ馴ず。婦の道を盡し，能事を云甲斐なき事に思ふべきなれど，斯眞實に婦德を竭し，夫に事む人は，天地神明の尊覽にハ」十五オ嶺に幽閑き松とハ見たまはん。千草萬木に秀たる君子の操といふべし。艾となりて栄んよりハ，蘭となりて衰るには』十五ウ孰若じ。

一　婦人に婦德婦言婦容婦功の四の行跡有。第一婦德とて，氣質を能し偽らず，辟まず，我慢ならず，」十六オ嫉妬せず，狐疑せず，萬に意質好やうに嗜事と知べし。第二婦言とて，言葉を愼て物事鬼鬼いふハつたなし。言舌強からず，不淫，』十六ウ高聲からぬぞよき。強て尋常にいはんとするも，巧言たるやうにて惡し。勿論，口佞しく我知りたる顔に詈もいやし。」十七オ都て言遣ひに限らず，凡女の言まじき事ハ，いかに懇人に遇ても，口より外へ出すべからず。第三婦容とて，』十七ウ粧容の事なり。鷄鳴ごとに身を清，梳，化粧し，衣着起居擧動神妙にするの類也。髮容化粧衣着のやうす，身の莊，人〳〵」一八オ相應になすべし。然に，當時世にもて時勢抔いひて，異容なる衣裳などの模様，又ハ浮華なる時粧など，いかさま』十八ウ奇異様にと好べからず。たゞ有べきかぎりにて見たる所の麗がよし。第四に婦功とて，紡績裁縫洗濯の事」十九オよりしはじめ，萬女の所業，眞實に勤めて懈るべからず。

一　繼母の繼子を惡事の太甚至りて，歎き事ぞ』十九ウかし。繼子は我子の兄弟也。

縱我血を賦與ずといふとも，我子の父の骨肉を頒たるの子なれバ，夫婦一體の理にてハ的當我」二十オ子也。何とて繼子をバ憎隔べきや。我惡の心を止て，眞實に愛憐をなすべし。されバ，繼母とは繼たる母と文字にも書り。物を』二十ウ合するにも，美物に惡き物をつがず。同じやうなる物ならでハ接合がたし。蜂といふ蟲の，外の蟲を取集て我に」二十一オ似よ〳〵といふて育るに，親の形に違ず，必蜂になるとかや。心なき蟲すら猶しかり。況や人間をや。假不仁の生稟たりとも，』二十一ウ我に似よと養育し，憐介抱んに，我に似事容易べし。或は，姑の惡きを筭て夫に告るハ，我親の咎を揚るに等し。繼子の」二十二オ惡事を夫に告るハ，是繼子の惡事のミを告るに非ず。我其親となりて，憎讎直なる道を教ずして，惡事に馴て惡く養育』二十二ウし，却て其咎を露顯謗事，是我恥にあらずや。嫜を疎略，繼子を僻憎て，還て夫をのミ一重に愛せん事人倫の道にあら」二十三オざるべし。若夫に弃られ果なバ，楫を絶たる船の如くよる方もなく浮岩ぬべし。心を慎て，萬事につき私なく，繼子を我子』二十三ウよりも仁慈，夫の訓を受從ふべき事第一なり。

一　夫女ハ先心遣ひ能々夫に見ゆべき事第一也。姿兒は生質なれバ，美も」二十四オ醜も力及ばず。心と擧動ハ善もなり，惡もなる物なれバ，萬慎て大事にかくべき也。假夫死しての後も貞心を懷べからず。二夫に見へん』二十四ウ事有まじき事也。俗間の体を見るに，女の夫に別るの時ハ，當就，歎の餘り薙髪染衣のたぐひ多けれ共，日數稍〳〵つもりぬれバ，逝者」二十五オは日々に疎く，歎も遠ざかり，哀も早晩しか失はてゝ，近づく惡緣にひかれて，浮名を流し恥を顯はす事心憂るべし。存生たる』二十五ウ時貞心竭ずして死する，何の怨によりて志を諠べきや。假又存生たる時恨有し閒なり共，我身の恥を知らざらむや。此心」二十六オを能思ひて，身をあらぬ人に寄べからず。

一　新古今集不邪婬戒の意を讀る。

さらぬだに重がうへの』二十六ウ
小夜衣我妻ならぬ
妻なかさねそ

男にてだに耽淫ハ，現世後の世ともに究罪重き事なるに，增て女の邪淫」二十七オたらんハ，仏も疎玉ひ，神も惡果玉ふべく，なか〳〵云べき方なき仕形成べし。都て女の道ハ，我夫ならぬ夫を重ぬる事ハ扨置て，貞女二』二十七ウ夫を更ず，と史記と云書にも見え侍り。昔唐に姚玉景といひし女子，十六歳にて夫失けれバ，父母憐て，又他夫に配せんと云けれバ，」二十八オいかで貞女の道を失はんとて，親の言葉にも從はで，たゞ寡あり渡りける。其家に年來來馴たる燕の一偶有けるが，雄失て雌たゞ』二十八ウ孤異雄にも

偶はで飛行けり。姚玉景其雌に云やう，汝も心あらバ，異雄に配偶事なかれ。自が食を啄て，自と同じ清き心にて」二十九オ あれかし，といひ含め，繼糸をもて其足につけて印として，念頃に飼ならしける。其秋ハ燕歸去て，翌年の春，異雄にも双ず』二十九ウ して孤姚玉景が家に來りけれバ，いとゞ哀と思ひて詩を作りていはく，

昔時無レ偶去。今年
還獨歸。古人恩既重。」三十オ
不レ忍二更雙飛一

昔時無偶去今年還獨歸とハ，こぞの秋双なくして去たる燕の，今年獨歸たるよ，といへる心也。』三十ウ 古人恩既重不忍更双飛とハ，彼身終たる男の恩愛深く重けれバ，改て他夫に姻偶事ハいと堪がたし，と云心を，今頃つばめに」三十一オ 擬て，雙飛に忍びず，とハいへり。誠に，貞女の志にハ非情の鳥類も感じ侍き。增て人なるをもつて鳥にだも不如べけんや。』三十一ウ

一　妻女の道正しからざれバ，内乱れ，家凶る事昔より數多し。行義能婦の四德を備，慈愛の意深く，舅姑に能つかへ，」三十二オ 子孫を善教導き，閨門の教正きを賢女と云べし。宋王の夫人に伯姫といへる有。夜御殿に失火有けるに，人々皆北散しに，』三十二ウ 一人の臣下疾出玉へといひけれ共，女の禮儀，侍女二人供ざれバ夜は歩行せぬ法也とて，出玉はず。終に燒死玉ひけり。此外節義の為」三十三オ に，高行と云女ハ鼻を刳，令女は馘，季氏ハ臂を割，盧氏は目を抉て捨しとなり。かやうの賢女は名も高く，末代の鏡也。妻，才』三十三ウ 知なれバ，夫の禍ひ少なき者也。夫の美を揚善を顯し，六親を和合せしめ，卑き夫にても，恐慎，よく隨て貴見する也。家の栄衰ハ，」三十四オ 妻の善惡によるものなれバ，能慎て婦の道を守べし。

一　凡女子は他の家に行，一生身を任せ終るものなれバ，憂苦堪忍ざれバ，我身を』三十四ウ 保事不克。古人も，難レ成二女子一百年憂苦任二他人一と，宜なるかな。此言，舅姑はじめ一家親類從類眷屬に至るまで，風波の厲ごとき」三十五オ 世間の人情なれバ，我心に物事十に九つはかなふ事有まじ。たゞ物に能忍を以身を保の要とすべし。夫堪忍の文字ハ，堪はたへ，』三十五ウ 忍ハしのぶと訓り。又こらへるとも訓り。忍の一字を忘るゝ時は，一生身を保難し。易といふ書にも，忍の字の象を人の心の」三十六オ 上に氷の如き刃をさし置たるに比へり。心の上に利刃をさし當たらんには，身を思ひのまゝに働く事なるべからず。能慎ミ堪忍』三十六ウ を以女子の婦德と云べし。

一　百行の善事も堪忍をもつて第一とす。片時の憤を忍びず，猥に怒を發し恣なれバ，身を凶し，」三十七オ 命を失ふ。譬バ鉄の錆を出して本性を失ひ，竹の實を生

じて枯るゝが如し。唐土の書にも，心上の炎を添る事なかれ，唯耳』三十七ウの邊の風となせ，といへり。怒氣甚しけれバ，心火熾に炎本心の明智を闇し，腹黒心人を怒詈，心猛しき鮫迅面烈眼恐しく，言葉」三十八オ荒々敷，物いひ無善，人を託身を恨，外見にハ鬼女の如し。誠に女子たる人，各々我身に省て心を和順にし，萬事堪忍び，親戚奴婢等に』三十八ウ至まで慈愛を專にすべし。

一　夫人を仕はむにハ，第一慈愛深く惠憐ミて，恨讎まぬ様に心得たるがよし。我身も下人を仕はねバ，主用」三十九オ達せず。下々ハ又主人を因まねバ，衣食の寄所なし。宿善の果報によりて，主人となり，從類となるといへども，元天地一體の身なれば，』三十九ウ我に仕るゝも彼等を仕も現世ばかりの機縁にハあらじ，と深く思ひとりて一衣の衣類をも施し，一食をも頒あたへ，眞實に慈悲を」四十オなさバ，いかでか其恩を疎に思はんや。假令我夫の心に合ぬ下人なりとも，能々言，敎烈からず，和融に誡むべし。又夫の前にても能』四十ウさまにいひなして，下人の咎を擧べからず。善も惡も婦人の作になるなれバ，萬事惠憐む心あらんにハ，其家和睦して，婦人」四十一オの德いよ〳〵顯るべし。陶淵明のいへる，彼も人の子なり。愛憐ミて仕ふべし，と，永此心を忘るべからず。』四十一ウ

小　林　新兵衛
英　　大　助
和泉屋　市兵衛
江戸書林　山口屋　藤兵衛
藤岡屋　菱次郎
山崎屋　清　七
上総屋　友次郎

(1994. 12. 10)